



東南アジア

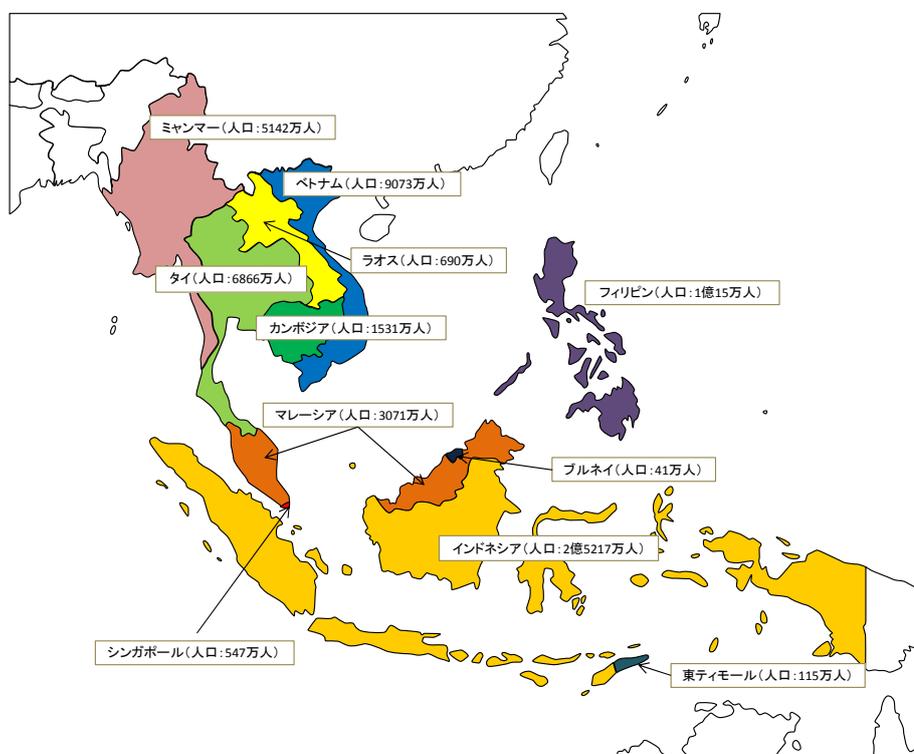
1 農・畜産業の概況

アジア開発銀行によると、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟 10 カ国（図 1）のうち、シンガポールとブルネイは、GDP に占める農業の割合が 1% 以下と低い一方、経済成長の著しいマレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナムの 5 カ国（以下「5 カ国」という）は、9~18%（2014 年）となっている。これら 5 カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になっている中で、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、米（コメ）などの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の産出額が増加しないという特徴も有している。上記以外の残り 3 カ国は、カンボジアが 30.5%、ミャンマー

が 27.9%、ラオスが 24.8%（同年）と高くなっている。これらの 3 カ国は、政情不安が長引いたことなどから農業以外の産業の発展が遅れており、相対的に農業の比重が高い。しかし、政情の安定化に伴う経済の発展により、その割合は低下してきている。

国別には、マレーシアは、油ヤシ、天然ゴムなど永年性作物の栽培が多い一方、フィリピンは、トウモロコシ、米などの穀物が中心となっているという特徴がある。畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、品目ごとの生産量には大きな差がある。

図 1 ASEAN 加盟国



資料：国際通貨基金（IMF）「World Economic Outlook Database」

注 1：数値は 2014 年。

注 2：東ティモールは ASEAN 非加盟国。

ASEAN 各国の主要穀物および畜産物の生産量を見ると、穀物が多くを占めており、中でも米の生産量が多い。また、主要な畜産物は、豚肉および鶏肉であるが、宗教上の理由から豚肉を消費しないイスラム教徒

の人口が多いインドネシアやマレーシアなどでは鶏肉の生産量が多く、宗教上の制約のないベトナムやフィリピンでは豚肉の生産量が多い（表 1）。

表 1 ASEAN の主要穀物および畜産物の生産量（シンガポール、ブルネイを除く）

（単位：千トン）

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2010	2,465	48	32	234	1,140	601	76
	2011	2,576	60	30	231	1,174	635	80
	2012	2,599	84	30	233	1,210	657	84
	2013	2,604	86	31	231	1,246	678	88
	2014	2,645	87	—	—	—	—	—
タイ	2010	34,409	5,124	223	895	1,220	980	911
	2011	36,128	5,266	207	880	1,243	996	982
	2012	38,000	4,948	210	949	1,319	1,054	1,022
	2013	36,762	4,876	195	967	1,379	1,063	1,095
	2014	32,620	4,805	—	—	—	—	—
インドネシア	2010	66,469	18,786	472	695	1,540	1,382	1,313
	2011	65,757	18,084	521	721	1,665	1,284	1,379
	2012	69,056	19,387	546	729	1,734	1,416	1,365
	2013	71,280	18,512	586	743	1,838	1,504	1,388
	2014	70,846	19,008	—	—	—	—	—
フィリピン	2010	15,772	6,377	300	1,636	869	424	16
	2011	16,684	6,971	301	1,642	920	441	16
	2012	18,032	7,407	295	1,653	985	461	18
	2013	18,439	7,377	297	1,681	1,047	469	20
	2014	18,968	7,771	—	—	—	—	—
ベトナム	2010	40,006	4,607	384	3,036	457	321	339
	2011	42,398	4,836	387	3,099	494	345	377
	2012	43,738	4,973	390	3,160	526	365	414
	2013	44,040	5,191	379	3,218	531	378	487
	2014	44,974	5,203	—	—	—	—	—
ラオス	2010	3,071	1,021	45	59	20	15	7
	2011	3,066	1,096	46	57	20	16	8
	2012	3,489	1,125	48	62	21	16	7
	2013	3,415	1,214	48	64	21	17	7
	2014	4,002	1,412	—	—	—	—	—
カンボジア	2010	8,245	773	73	105	20	22	24
	2011	8,779	717	73	110	19	22	23
	2012	9,291	951	73	99	19	23	23
	2013	9,390	927	73	99	18	23	23
	2014	9,324	550	—	—	—	—	—
ミャンマー	2010	32,580	1,376	234	585	1,016	381	1,620
	2011	29,010	1,485	254	619	1,079	412	1,684
	2012	26,217	1,502	260	620	1,080	421	1,626
	2013	26,372	1,601	262	621	1,082	425	1,708
	2014	26,423	1,693	—	—	—	—	—

資料：FAOSTAT

注 1：牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

2：トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

3：過去にさかのぼって数値が変更される場合がある。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

ASEAN10 各国では、牛乳・乳製品は、一般的な食材ではなく、また、気候条件が酪農にあまり適していないことや、良質な飼料の自給が困難なこともあり、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではなかった。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、主に全粉乳などの粉乳類か、缶入り加糖れん乳であった。しかし、近年は冷蔵施設の普及や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳の需要も高まりつつある。

各国とも、脆弱な酪農生産基盤により牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、2億人の人口を有し、近年、経済発展を遂げているインドネシアについては、乳製品需要の伸びが期待されており、ベトナムなどとともに、外資系企業の参入も積極的に行われている。

一方で、ASEAN 各国では、乳製品の定義や統計上の取り扱いがあいまいであることから、乳製品需給動向の正確な把握は困難となっている。

① 生乳生産動向

2014年における5カ国の乳用牛飼養頭数および生乳生産量は、乳製品需要の高まりを背景にタイの飼養頭数は前年をわずかに下回ったものの、5カ国全てにおいて増加した(表2)。

国別にみると、インドネシアは、乳用牛飼養頭数は、50万3000頭(前年比13.3%増)、生乳生産量は80万1000トン(同1.8%増)であった。乳用牛の大部分はジャカルタなどの大消費地に隣接するジャワ島の冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。繁殖牛の遺伝的能力が低く、零細な経営が多くを占めているという課題もあり、インドネシア政府は、牛肉の国内自給率を90%にするという目標のために、2012年から生体牛および牛肉の輸入規制等を行った結果、国内の牛肉需給がひっ迫し、これを補うために、国内の乳用牛

のと畜頭数が増加し、乳用牛が大幅に減少することとなった。2013年の下期から輸入の可否を国内牛肉価格で判断する基準価格方式の導入などにより、輸入規制は緩和された。

マレーシアは、乳用牛飼養頭数は3万3600頭(同4.6%増)であった。乳用牛の大半は半島部で飼養されている。飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラク州などである。同年の生乳生産量は、7万5000トン(同1.7%増)となっている。歴史的に油ヤシや天然ゴムのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤整備が課題となっている。

フィリピンは、乳用牛飼養頭数は、2万1600頭(同2.6%増)となっており、そのほか、水牛が乳用として飼養されている。生乳生産量は2万トン(同1.0%増)となり、うち約6割が牛由来、残りの4割は水牛乳とヤギ乳とみられている。

タイは、乳用牛飼養頭数は、50万8500頭(同0.7%減)と5カ国で唯一減少した一方、生乳生産量は106万7000トン(同21.3%増)と大幅に増加した。飼養頭数は、1999年から2005年まで増加傾向で推移していたが、2009年以降、原油価格や飼料価格などの低下とともに、減少傾向にある。

ベトナムは、乳用牛飼養頭数は、22万7600頭(同22.1%増)であった。乳用牛の約5割は、乳製品の主要消費地となるホーチミン市近郊で飼養されている。2001年に政府が酪農振興計画を打ち出して以来、大手乳業企業による大規模酪農場の開設などを背景に、飼養頭数が大幅に増加している。同年の生乳生産量は、頭数の増加を反映し、55万トン(同20.4%増)となっている。

表2 乳用牛飼養頭数と生乳生産動向 (2014年)

(単位:千頭、千トン)				
国名	飼養頭数	前年比 (増減率)	生乳生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	503.0	13.3%	801	1.8%
マレーシア	33.6	4.6%	75	1.7%
フィリピン	21.6	2.6%	20	1.0%
タイ	508.5	▲0.7%	1,067	21.3%
ベトナム	227.6	22.1%	550	20.4%

資料：各国統計

注1：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

注2：フィリピンの生乳生産量は水牛乳およびヤギ乳を含む。

② 牛乳・乳製品の需給動向

ASEAN 諸国では、牛乳・乳製品の国内消費量に占める輸入量（生乳換算）の割合は一般的に高く、多くの国で半分以上を占めている（表3）。

2013年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量を国別にみると、インドネシアは、14.8キログラム（同2.9%増）となった。国内で消費されている乳製品は調製粉乳と加糖れん乳が多く、牛乳の消費は少ない。

マレーシアは、32.4キログラム（同8.7%減）と、ASEAN 諸国の中でも多くなっている。同年の牛乳・乳製品の輸出量は48万5000トンとなっているが、ニュージーランドや豪州から輸入した粉乳を原料として、国内で調製品に加工して再輸出しているためである。甘いものを好む習慣があることから、れん乳が多く消費されており、牛乳はフレーバー付きの需要が高い。

フィリピンは、15.7キログラム（同3.2%増）となった。国内で流通する牛乳・乳製品のほぼ全量が、ニュージーランド、米国、豪州などからの輸入乳製品および輸入品を原料とした加工品となっている。

タイは、29.4キログラム（同3.2%減）となったが、デンマーク政府の協力により設立されたタイ酪農振興機構や外資系企業による牛乳・乳製品の生産拡大および学乳制度の導入などにより牛乳・乳製品の消費量は増加傾向で推移している。なお、同年の牛乳・乳製品の輸出量は24万1000トンとなっている。これは、豪州などから輸入した脱脂粉乳などを原料として、還元乳やれん乳などへ加工の上、周辺国などに輸出しているためである。

ベトナムは、16.4キログラム（同3.6%減）となった。従来、同国では牛乳や乳製品の消費量は少なかったが、経済成長と政府の酪農振興策を背景に、近年、

徐々に市民に受け入れられ、市場は拡大傾向にある。

表3 牛乳・乳製品の需給動向

(単位:千トン、kg)					
国名	生産量	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	1人当たり 消費量(2013年)
インドネシア	801	2,542	3,237	105	14.8
マレーシア	75	1,768	1,359	485	32.4
フィリピン	20	1,457	1,402	75	15.7
タイ	1,067	1,275	2,101	241	29.4
ベトナム	550	1,277	1,811	16	16.4

資料：生産量は各国統計（2014年）、それ以外はFAOSTAT（2013年）

注1：消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

注2：マレーシアの1人当たり消費量は同国の政府統計（2013年）。

(2) 肉牛・牛肉産業

ASEAN 諸国では、役用としての水牛が農作業の機械化により減少する一方、肉用牛の飼養頭数が増加している（図2、表4）。

牛肉需要を見ると、食習慣や経済状況の差が大きく、国ごとに1人当たり消費量に大きな差がある（表5）。また、1人当たり消費量は各国とも横ばいで推移している。

牛肉消費が伸びない要因は、牛肉が豚肉・鶏肉に比べて高価であることなどが挙げられる。

① 牛の生産動向

2014年の肉用牛飼養頭数を国別にみると、インドネシアは、2012年の生体牛輸入規制に伴うと畜頭数の増加により大幅に減少した前年の反動で、1472万7000頭（同16.1%増）と増加した。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占めている。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して一時的に肥育するフィードロット産業も盛んである。

マレーシアは、62万9000頭（同1.0%減）であり肉用牛が9割を占め、水牛が1割である。肉用牛の主な品種は在来種とこれらの品種との交雑種となっている。プランテーションで下草を食べさせる粗放的な一貫経営が多くみられ、フィードロットなどの集約的な経営を行っているところもある。

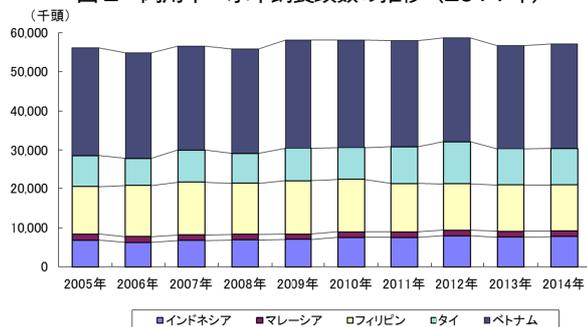
フィリピンは、251万2000頭（同0.6%増）となっている。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、牛・水牛ともに

飼養頭数が 20 頭未満の小規模経営が全体の 9 割以上を占めている。

タイは、政府の肉牛振興政策などにより 2001 年以降微増傾向で推移しており、431 万 2000 頭（同 4.8%減）となった。また、役用に供されている水牛の飼養頭数は 84 万頭（同 4.3%減）となった。

ベトナムは、153 万 8000 頭（同 13.1%減）となった。生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国や豪州から輸入して肥育を行う経営が一般的である。

図 2 肉用牛・水牛飼養頭数の推移（2014 年）



資料：各国統計

表 4 肉用牛・水牛飼養頭数と牛肉生産量（2014 年）

（単位：千頭、千トン）

	飼養頭数		牛肉生産量 (水牛を含む)	前年比 (増減率)
	肉用牛	水牛		
インドネシア	14,727	1,335	533	▲ 1.8%
マレーシア	629	121	52	0.2%
フィリピン	2,512	2,847	404	1.1%
タイ	4,312	840	177	▲ 8.9%
ベトナム	1,538	2,521	379	2.1%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

② 牛肉の需給動向

5 カ国の牛肉生産量は、2014 年は、インドネシアが 53 万 3000 トン（同 1.8%減）、マレーシアは 5 万 2000 トン（同 0.2%増）、フィリピンは 40 万 4000 トン（同 1.1% 増）、タイは 17 万 7000 トン（同 8.9%減）、ベトナムは 37 万 9000 トン（同 2.1%増）となった（図 3）。

インドネシアの 2013 年の牛肉の 1 人当たり年間消費量は、2.6 キログラム（同 8.8%増）となっている。牛肉消費は、民族・宗教によって慣習が異なることから、地域ごとに異なり、ジャワ島など一部地域に

集中している。

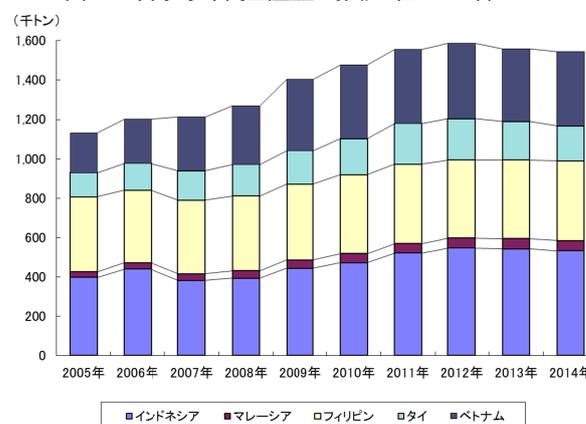
マレーシアの 2013 年の牛肉の 1 人当たり年間消費量は、6.7 キログラム（同 9.6%増）となった。輸入量は、牛肉の消費量とほぼ同じ割合で増加しており、消費の伸びを支えている。牛肉自給率は 2 割程度で、輸入牛肉への依存度が高い。主な輸入先国はインド、豪州である。

フィリピンの 2013 年の牛肉の 1 人当たり年間消費量は、4.1 キログラム（同 4.2%減）であった。牛肉自給率は 8 割程度であり、主な輸入先国は、インド、ブラジル、豪州などである。このうち、インドからの、安価な水牛肉はコンビーフに加工されるなどして食されている。

タイの 2013 年の牛肉の 1 人当たり年間消費量は、2.6 キログラム（同 7.9%減）となった。牛肉輸入量は、3 万 3000 トンと 5 カ国中で一番少なくなっている。

ベトナムの 2013 年の牛肉の 1 人当たり年間消費量は、7.4 キログラム（同 0.5%減）であった。牛肉自給率は 5 割程度であり、主な輸入先国は、豪州、ニュージーランド、インド、米国などである。

図 3 牛肉・水牛肉生産量の推移（2014 年）



資料：各国統計

表 5 牛肉の需給動向

（単位：千トン、kg）

国名	生産量	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	1人当たり 消費量(2013年)
インドネシア	533	61	594	0	2.6
マレーシア	52	182	227	7	6.7
フィリピン	404	101	504	1	4.1
タイ	177	33	160	50	2.6
ベトナム	379	534	912	0	7.4

資料：生産量は各国統計（2014 年）、それ以外は FAOSTAT（2013 年）

注 1：水牛肉を含む。

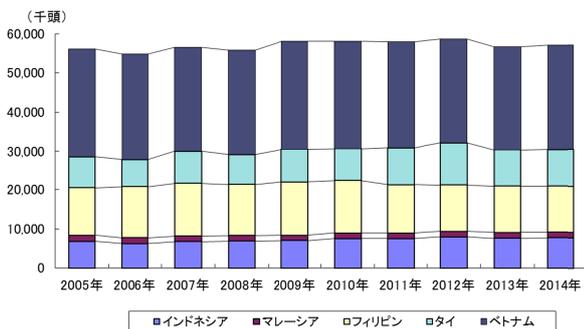
2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

3：マレーシアの 1 人当たり消費量は同国の政府統計（2013 年）

(3) 養豚・豚肉産業

ASEAN 諸国は、インドネシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒の人口が多いが、国によって豚肉の消費量には大きな格差があり、国の政策上の位置付けもさまざまである。他方、イスラム教徒が多数を占める国でも、中国系住民などの豚肉需要はあり、飼養規模、地域などにおいて限定的ではあるものの、養豚業は行われている（図4）。

図4 豚飼養頭数の推移（2014年）



資料：各国統計

① 豚の生産動向

ASEAN 諸国は、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）などの家畜疾病が継続的に発生しているため、家畜衛生対策が課題である。

インドネシアの豚飼養頭数は2007年以降増加傾向で推移してきたが、2014年は769万4000頭（同1.3%増）となった（表6）。

マレーシアの2014年の豚飼養頭数は、イスラム教徒の人口が多いこともあり、142万5000頭（前年同）とわずかである。

フィリピンは宗教的な制約が少ないことから、5カ国の中でベトナムに次いで飼養頭数は多い。近年は、2009年をピークに減少傾向で推移しており、2014年は1180万2000頭（同0.3%減）となった。

タイの豚飼養頭数は、価格変動や疾病などの影響により増減を繰り返して推移しており、2014年は950万5000頭（前年同）となった。

ベトナムは、アジアでは中国に次いで豚飼養頭数が多く、豚肉需要の伸びを受けて2014年は2676万1000頭（同1.9%増）となった。

表6 豚飼養頭数と豚肉生産量（2014年）
（千頭、千トン）

国名	飼養頭数	生産量	前年比 （増減率）
インドネシア	7,694	302	1.3%
マレーシア	1,425	218	0.1%
フィリピン	11,802	2,032	1.0%
タイ	9,505	1,026	6.1%
ベトナム	26,761	3,351	4.1%

資料：各国統計

注：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

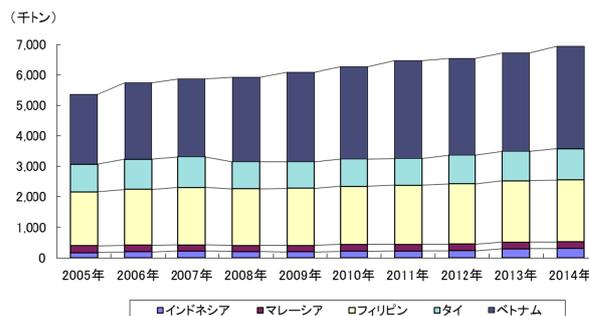
② 豚肉の需給動向

5カ国の豚肉生産量は、全体的に増加傾向で推移しており、2014年は、インドネシアが30万2000トン（同1.3%増）、マレーシアは21万8000トン（同0.1%増）、フィリピンは203万2000トン（同1.0%増）、タイは102万6000トン（同6.1%増）、ベトナムは335万1000トン（同4.1%増）となった（表6、図5）。

ASEAN 諸国の豚肉消費動向は、宗教の影響を強く受けており、2013年の1人当たり豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアで3.0キログラムであったのに対し、食肉に関する宗教的制約の少ないベトナムで35.0キログラム、フィリピンで18.4キログラム、タイで13.0キログラムとなっており、国による差が大きくなっている（表7）。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民（非ムスリム）などが人口の4割程度を占めていることから、2013年の1人当たり豚肉消費量は7.5キログラムであるが、非ムスリムに限ると同18.7キログラムとなっている。

図5 豚肉の生産量の推移（2014年）



資料：各国統計

表7 豚肉の需給動向

国名	生産量	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	(千トン、kg)
					1人当たり 消費量(2013年)
インドネシア	302	2	304	1	3.0
マレーシア	218	16	224	9	7.5*(19.7)
フィリピン	2,032	108	2,137	3	18.4
タイ	1,026	1	1,009	19	13.0
ベトナム	3,351	0	3,350	1	35.0

資料：生産量は各国統計（2014年）、それ以外はFAOSTAT（2013年）

注1：消費量は、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

3：マレーシアの（）内は非ムスリムのデータ。

4：マレーシアの1人当たり消費量は同国の統計（2013年）。

(4) 養鶏・鶏肉産業

① 鶏の生産動向

ASEAN 諸国では、肉用鶏や採卵鶏の飼養が盛んであり、在来鶏を中心に、アヒルなどの家きんが飼養されている（図6、表8）。

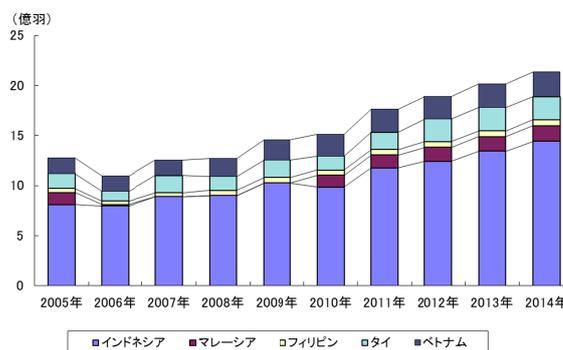
インドネシアは、ASEAN 諸国で鶏の飼養羽数が最多である。肉用鶏の飼養羽数は、南スラウェシ州などで発生した鳥インフルエンザの影響を受け、2010年に減少したが、その後順調に回復し、2014年14億4335万羽（同7.4%増）、鶏肉生産量は154万4000トン（同3.1%増）となった。同年の採卵鶏の飼養羽数は、2億7512万羽（同0.6%減）、鶏卵生産量は124万4000トン（同1.6%増）となった。飼養羽数に比較して小さな値となっているのは、コールドチェーンが未発達であることなどにより、食鳥処理場以外で処理したり、生きたまま販売したりするケースが多数を占め、統計上全体の生産量が把握できないためと考えられる。

マレーシアの肉用鶏の飼養羽数は、2005年の鳥インフルエンザの発生により減少がみられたものの、徐々に回復し、2014年には1億5630万羽（同7.7%増）、鶏肉生産量は157万3000トン（同7.9%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は5564万羽（前年同）、鶏卵生産量は72万8000トン（同6.4%増）となった。

フィリピンの2014年の肉用鶏飼養羽数は、6158万羽（同4.0%増）、鶏肉生産量は157万2000トン（同1.1%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は3001万羽（同6.2%減）、鶏卵生産量は41万6000トン（同2.8%減）となった。

タイは、鳥インフルエンザが発生した2004年以降、EUや日本向けの生鮮鶏肉の輸出が停止していたが、EU向けは2012年7月、日本向けは2013年12月に解禁した。2014年の肉用鶏の飼養羽数は、2億2882万羽（同2.9%減）となった。採卵鶏の飼養羽数は、近年は横ばいで推移しており、2014年は5295万羽（同3.8%増）となった。また、同年の生産量は、鶏肉が165万8000トン（同9.7%増）、鶏卵が68万トン（同5.1%増）となった。

図6 肉用鶏の飼養羽数の推移（2014年）



資料：各国統計

表8 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量

国名	飼養羽数		生産量			
	肉用鶏	採卵鶏	鶏肉	前年比 (増減率)	鶏卵	前年比 (増減率)
インドネシア	1,443,349	275,116	1,544	3.1%	1,244	1.6%
マレーシア	156,298	55,636	1,573	7.9%	728	6.4%
フィリピン	61,582	30,007	1,572	1.1%	416	▲2.8%
タイ	228,816	52,951	1,658	9.7%	680	5.1%
ベトナム	246,028	—	875	17.1%	476	5.7%

資料：各国統計

注：鶏卵は1個58グラムで換算。

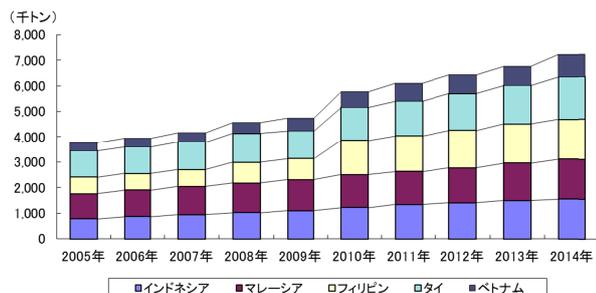
② 鶏肉の需給動向

鶏肉は宗教上の制約が少ないことから、ASEAN 諸国では最も身近で重要な動物タンパク源となっており、経済成長に伴う消費の伸びを受け、生産量は増加傾向で推移している（図7、表9）。需要の増加を背景に、外資による食鳥処理場の整備や大手ファストフードの参入などが増加している。

マレーシアの2013年の1人当たりの年間鶏肉消費量は、50.7キログラムとなった。同国は、イスラム教を信仰するマレー系などが人口の過半を占めていることから、宗教的な制約が少ない鶏肉が多く消費されている。

タイの1人当たり年間鶏肉消費量は、13.7 キログラムとなった。タイは鶏肉の輸出に注力しており、輸出の伸びを背景に鶏肉生産量も増加傾向にある。近年は、国内消費が約7割、輸出が約3割となっている。2004年1月以降、鶏肉の主要輸出先国が、鳥インフルエンザ発生により同国からの家きんなどの輸入一時停止措置を実施したため、輸出は、冷凍鶏肉から鶏肉調製品に移行した。

図7 肉用鶏生産量の推移 (2014年)



資料：各国統計

表9 肉用鶏の需給の推移

国名	生産量	輸入量 (2013年)	消費量 (2013年)	輸出量	1人当たり消費量 (2013年)
インドネシア	1,544	1	1,546	0	7.5
マレーシア	1,573	48	1,589	32	50.7
フィリピン	1,572	99	1,664	7	11.9
タイ	1,658	11	936	734	13.7
ベトナム	875	115	990	0	12.4

資料：生産量は各国統計 (2014年)、それ以外は FAOSTAT (2013年)

注1：国内消費量は、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

2：マレーシアは半島部のみ (サバ、サラワク州を含まず)。

3：マレーシアの1人当たり消費量は同国の政府統計 (2013年)。

③ 鶏卵の需給動向

東南アジア諸国は、鶏卵価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定機能が十分に働かないことから、頻繁に供給過剰問題を抱えることとなる。

1人当たり鶏卵消費量は、インドネシアが4.9キログラム、マレーシアが22.4キログラム、フィリピンが4.0キログラム、タイが12.4キログラム、ベトナムが3.8キログラムと、国によって大きな開きがある (表10)。

表10 鶏卵の需給動向

国名	生産量	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	1人1年当たり消費量(2013年)
インドネシア	1,244	0	1,244	0	4.9
マレーシア	728	0	633	95	22.4
フィリピン	416	0	416	0	4.0
タイ	680	0	659	21	12.4
ベトナム	476	0	474	2	3.8

資料：生産量は各国統計 (2014年)、それ以外は FAOSTAT (2013年)

注1：鶏卵は1個58グラムで換算。

2：国内消費量は、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

3：マレーシアは半島部のみ (サバ、サラワク州を含まず)。